

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学

所 属 都市工学科

名 前 中村隆司

作成日 2021年8月3日

1. 責務

「*」ではじまるコメントは執筆時に当該セルごと削除してください。

都市計画系の講義（都市計画1、インフラデザイン、都市地域分析、地域計画特論）を担当し、卒業研究及び修士論文研究の指導を担当している。また、最近では、オンラインによる講義、修士科目での英語による講義にも対処している。

2. 理念

全体のまちづくりも理解できる土木建築技術者を育成するとともに、直接まちづくりに携わる人材を育成することを教育の目標において、以下の点を理念として教育活動を実施している。

- ① まちづくりの理念を示し理解してもらうこと、この点については、最近特に学生のレポート等から賑わっていることが都市計画の成功だと思っている学生が意外に多いことが気になっているところであり、近代都市計画は劣悪な居住環境の改善という「公衆衛生」から発達してきたものであり、都市計画は金儲けや景気対策の道具ではないという点を理解してもらいたいと考えている。
- ② まちづくりには、優れた限られたデザインの実現だけでなく、普通の民間の家庭・企業等が普通に社会活動に対処していれば良い都市になるような仕組み（住民参加等も含めた制度）が重要であることを理解させ現状の都市計画制度を理解できるようにする。

3. 方法

上記①、②の理念のもとに以下のような6つの方針の下で、7点の方法を実施している。これらの具体的な方法については、複数の方針に対応するものも存在する。

方針1：実際の都市計画文書の正確な理解ができるようにする

- ・ 方法1：計画書や写真等実例の提示、かつての日本の都市からの変遷と現状の提示
- ・ 方法2：前回講義への質問に対する回答、理解度の不足が目立つ項目の復習
- ・ 方法3：公務員試験問題の確認
- ・ 方法4：きちんと講義ノートを書くようにさせる。このためにコロナパンデミックの前は講義ノートを提出させチェックコメントを付記した上で返却していたが、コロナ感染状況の下でオンラインによる講義となったため、Webclass を活用して、講義当日中の講義後課題の回答によって同様の効果を目指している。
- ・ 方法5：実際の都市計画文書の正確な理解ができているのかの確認、そのためのWebclass を活用した講義当日中の講義後課題への回答
- ・ 方法6：国際会議への積極的な参加と現地の視察、講義材料の収集、修士学生の積極的な国際学会での発表

方針2：土木・建築系は特に幅広い公共性を有する分野なので幅広い視野と視点を身に付けられるようにする

- ・ 方法1：計画書や写真等実例の提示
- ・ 方法6：国際会議への積極的な参加と現地の視察、講義材料の収集、修士学生の積極的な国際学会での発表

方針3：最近の学生は現在の都市の状況に満足しているような傾向があるが、国際的に見て日本の都市は決してレベルは高く無いことを理解してもらう

- ・ 方法1：計画書や写真等実例の提示
- ・ 方法6：国際会議への積極的な参加と現地の視察、講義材料の収集、修士学生の積極的な国際学会での発表

方針4：公務員試験に合格しUR等のまちづくり関係の職場に就職できる能力を付ける。

この点については、方針1に対する方法1～方法6が同様に対応するが、特に公務員試験の出題については、確認を怠らないようにしている。

方針5：まちづくりの国際的な動向について理解してもらう

- ・ 方法6：国際会議への積極的な参加と現地の視察、講義材料の収集、修士学生の積極的な国際学会での発表

方針6：今後国際化がさらに進む社会に対応した内容にする

- ・ 方法6：国際会議への積極的な参加と現地の視察、講義材料の収集、修士学生の積極的な国際学会での発表
- ・ 方法7：特論の英語による実施

4. 成果

授業評価アンケートは全般に向上している。オンラインの講義の方がわかりやすいという感想もあり対面講義でも同様な評価となるようにすることが今後の課題である。特論の英語による講義は資料作成等苦勞したが、学生のレポート及び寄せられた質問から講義が理解されていることは確認できた。

学生の国際会議での発表を最近10年で4人行ってきた。

毎年公務員に合格しURにも継続的に就職するようになった。

卒業生の中には、東日本大震災の際に、志願して被災地に赴任した者が複数名おり、彼らに話をしてもらい機会を設けることができた。

5. 目標

短期的目標としては、オンラインの講義の方がわかりやすいという感想もあり対面講義でも同様な評価となるようにすることが今後の課題である。英語講義資料の充実も行いたい。また、講義の余裕が無い中でできれば卒業生に実務経験の話をしてもらう機会を設けたい。長期的には、「まちづくり」が建造物によってできているだけでなく、伝統的なお祭り等の居住者の活動によってなりたっている複合的な面も示していければ良いと考えている。

【添付資料】

- ・ 学生アンケート
- ・ 学生の国際会議発表 4 人

①③Miyu Yada, Takashi Nakamura, Actual Condition of Employee Number in Japanese Local Cities' Central Areas, World Multidisciplinary Civil Engineering-Architecture-Urban Planning Symposium, pp.424, 2019.6

②Ruri Nakatsukasa, Takashi Nakamura, The Actual Condition of The Landscape Plan Based on The Landscape Act in Central Urban Area of Local Cities, World Multidisciplinary Civil Engineering-Architecture-Urban Planning Symposium program book,pp.426,2019.6

③Koki Fujimoto & Takashi Nakamura, The Actual Condition of Vacant Houses Location in Central Urban Area of Local Cities, THE 4th NZAAR INTERNATIONAL EVENT SERIES ON NATURAL AND BUILT, UDCP 2018,pp. 162-169, 2018.1

④Satoru Tanaka, Takashi Nakamura, Development of Tama-Den-en-toshi -An Example of a Successful Residential Development in Suburban Tokyo-, 2015 international Symposium on Urban Planning Asia-Padific Planning Conference Proceeding,pp. 80-83, 2015.8